

# 事業計画及び成長可能性に関する説明資料

## ー フィジカルAIの発展をリードする空間知覚

---

Kudan株式会社（東証グロース：4425）  
2026年6月30日

# 事業概要とビジネスモデル

---

# KudanはフィジカルAIを支える「機械の眼」

## 身体性のない従来AI（デジタル空間）



売上と顧客データを分析し、今後の商品アイデアと顧客ターゲットを考えて

新製品の特徴を効果的に宣伝する広告イメージを生成して

AIの学習プロセス

データ取得

学習

## 身体性のあるフィジカルAI（現実空間）

～2040年で160兆円<sup>1</sup>の市場



生産現場を巡回して設備の運用状況を確認し、稼働低下の要因と対策を考えて

この部品を現場に届けて設置し、動作確認をして

AIの学習プロセス

知覚（機械の眼）



行動

継続学習

# フィジカルAIに向かって融合する「デジタルツイン」と「ロボット」

## デジタルツインによる現実空間の知覚

参考動画: <https://x.gd/AehmS>



知覚（機械の眼）

行動

継続学習

- 手動で現実空間を3Dスキャンし、AIとして知覚させる

## ロボットの自律制御

参考動画: <https://x.gd/p1ME>



知覚（機械の眼）

行動

継続学習

- 知覚するロボットが現実空間を動き回り、知覚が行動とつながる

知覚から学習までの自動ループが完成し、真のフィジカルAIへと発展する

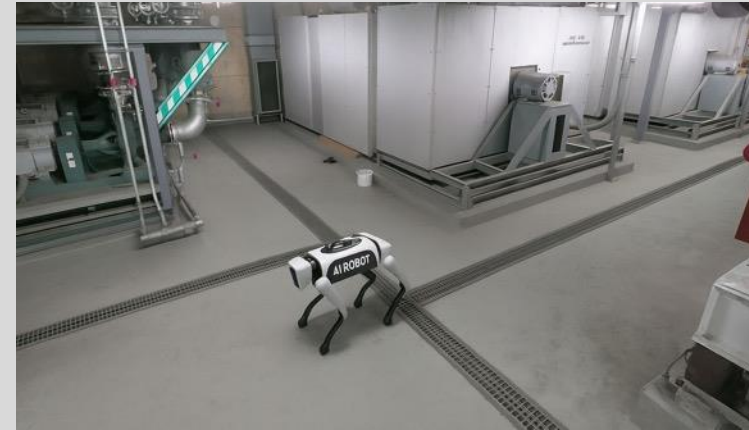
# 双方を下支えする空間知覚を提供

## デジタルツインによる現場管理DX・生産性向上



現実をデジタル空間上に複製

## 自律移動ロボットによる無人化・省人化



ロボットが空間をデジタルに知覚して行動

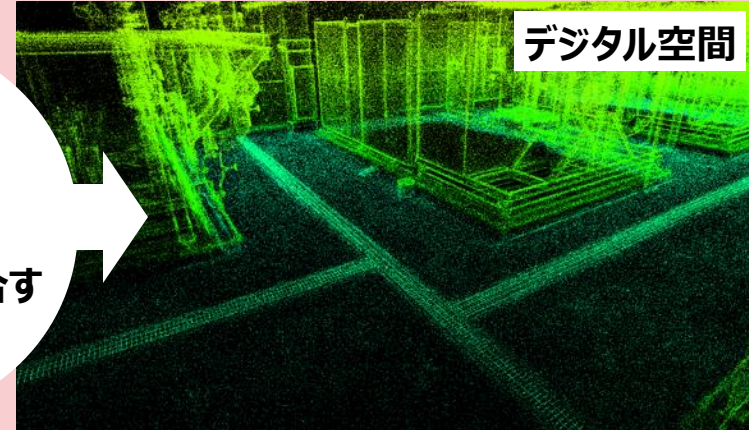
## Kudanは空間知覚を技術プラットフォームとして提供



現実空間



空間同士を結合する「機械の眼」



デジタル空間

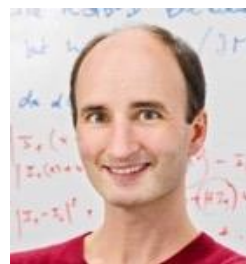
**GB ブリストル (技術・営業)**  
• 2011年 Kudanグループ創業

**JP 東京 (管理・技術)**  
• 2014年 設立  
• 2018年 東証上場

**US シリコンバレー (営業)**  
• 2020年 設立

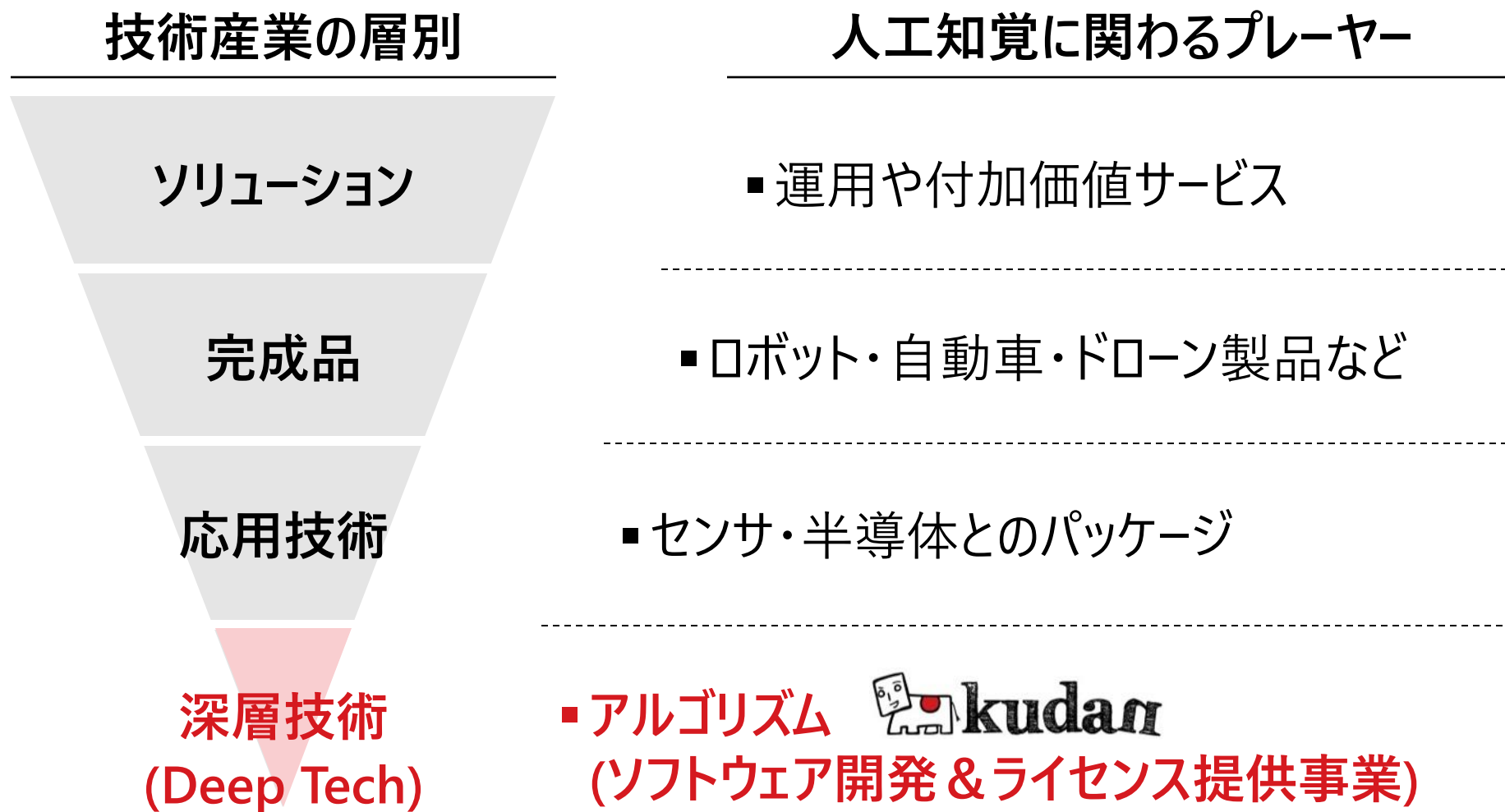
**DE ミュンヘン (技術・営業)**  
• 2017年 Artisense社設立  
• 2021年 子会社化 (現Kudan Germany)

## Kudan Germany創業者 ダニエル・クレーマーズ教授



### 世界で最も影響力が高い<sup>1</sup>SLAM研究者

- ミュンヘン工科大 主席教授
- 当技術分野の基礎を開拓した第一人者
- 論文引用8.5万件、h-index 129 (ノーベル賞級)
- 独学术界全体の最高権威「ライプニッツ賞」



少数精鋭で最大価値、置き換え困難

ロボット向け

デジタルツイン向け

## SWアルゴリズム (コア技術要素)

### • 開発者向けの数理処理プログラム

- SLAM (localization & mapping)
- Robot navigation
- Photo-real/ semantic digital twin など



SWライセンス

SW開発支援

## SWソリューション (収益拡大要素)

### • ユーザー向け機能を統合したアプリケーション

- 設備点検・管理ソリューション (PRISM) など



SWライセンス

## HWパッケージ (収益拡大要素)

### • ソフトウェア利用を補完する機器

- 3Dスキャナー
- センサ・コンピュータ
- ロボット など



デバイス販売

# 市場環境と競争力

---

## 国家戦略としてのフィジカルAI

### 産業競争力の強化

- 日本の強み（製造業・ロボット・センサー）の競争力転換
- AI時代における競争優位性の確立

### 人手不足への対応

- 高齢化・人口減少・過疎化による労働力不足の解消
- 物流・建設・介護などの現場作業維持

### 経済安全保障

- 産業基盤となる現場データの国内管理
- 海外プラットフォームへの全面依存リスク回避

# 現実空間としての「現場」を持つ全ての産業が市場

建設・土木



製造



物流



スマートシティ・自動運転



設備管理



災害対応



鉄道・道路



インフラ



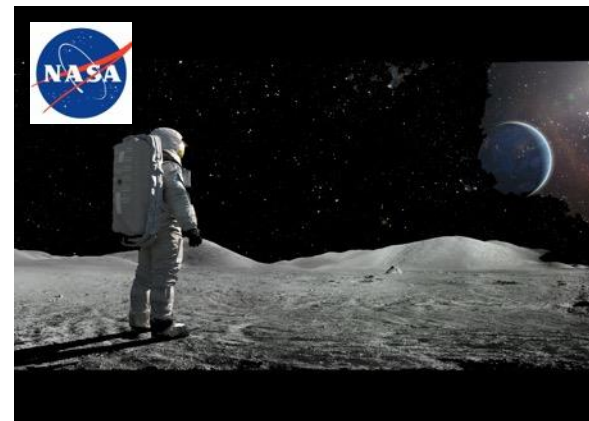
# これまでの実績（抜粋）



• 自律走行ロボット向け連携



• スーパーボウル放映のロボットカメラ



• 月面での空間認識の研究開発



• スマート造船プロジェクト



• 配達ロボット



• 自動運転研究開発



• 物流施設・インフラ施設など



• 自動搬送ロボットなど

## ロボット向けに提供するパッケージ

**intel.** ソフトウェア（開発キット）

ロボット用アプリケーション

地図作成・利用など



3D認識など

センサー統合など

+

**intel.** ハードウェア（半導体プロセッサ）

「Intel入ってる」の中核に  
「Kudan入ってる！」

- ✓ 性能が向上
- ✓ 開発期間が短縮
- ✓ ロボット実用化がさらに加速

- 2024年よりNFLスーパーボウル等の世界最高峰の舞台で採用され、2025年はシーズンを通してNFL放映の実運用で拡大（特許取得済）
- 世界規模のスポーツ・ライブイベントへの拡大を目指す

XR放映用ロボットカメラ

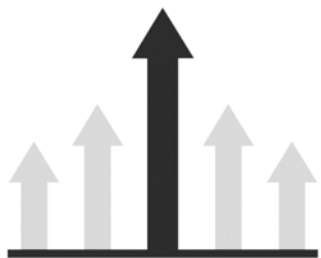


拡張現実（AR）効果を活用したNFL放送イメージ



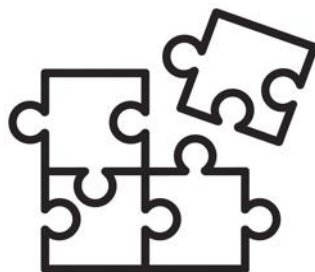
## 1. 先進性

- SLAM/AI融合/フォトリアル技術等、世界水準の独自技術
- 独立系SLAM技術企業としては世界最大の開発規模と実績



## 2. 拡張性

- デジタルツイン・ロボット双方に取り組むユニークな事業展開
- フィジカルAIの発展に向け技術シナジーと拡張性が高い



## 3. 情報安全性

- あらゆる空間の知覚は**秘匿情報**、**社会の安全保障で重要**
- 情報セキュリティの柔軟さにより、**産業向け・政府連携に対応**



フィジカルAIの技術プラットフォームにとって必須となる要件

# よくある質問 – 他のフィジカルAI企業と何が違うのか？

## 産業用ロボット企業と何が違う？

- 「**腕による操作**」に取り組むロボット企業が多い
- 「**足による移動**」に取り組むのがKudan



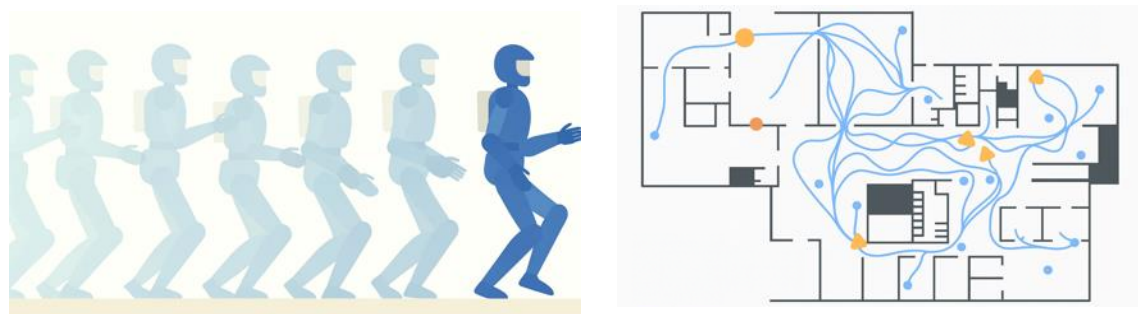
## すでに移動ロボットは普及が始まっているが何が違う？

- 「**単純環境**」でしか移動ロボットは普及していない
- 「**複雑環境**」が潜在市場のほとんどであり、Kudanが注力



## ヒューマノイド・四足ロボット企業とは何が違う？

- 「**腕捌き・足捌き**」に取り組むロボット企業が多い
- 「**ロボット移動タスク**」に取り組むのがKudan

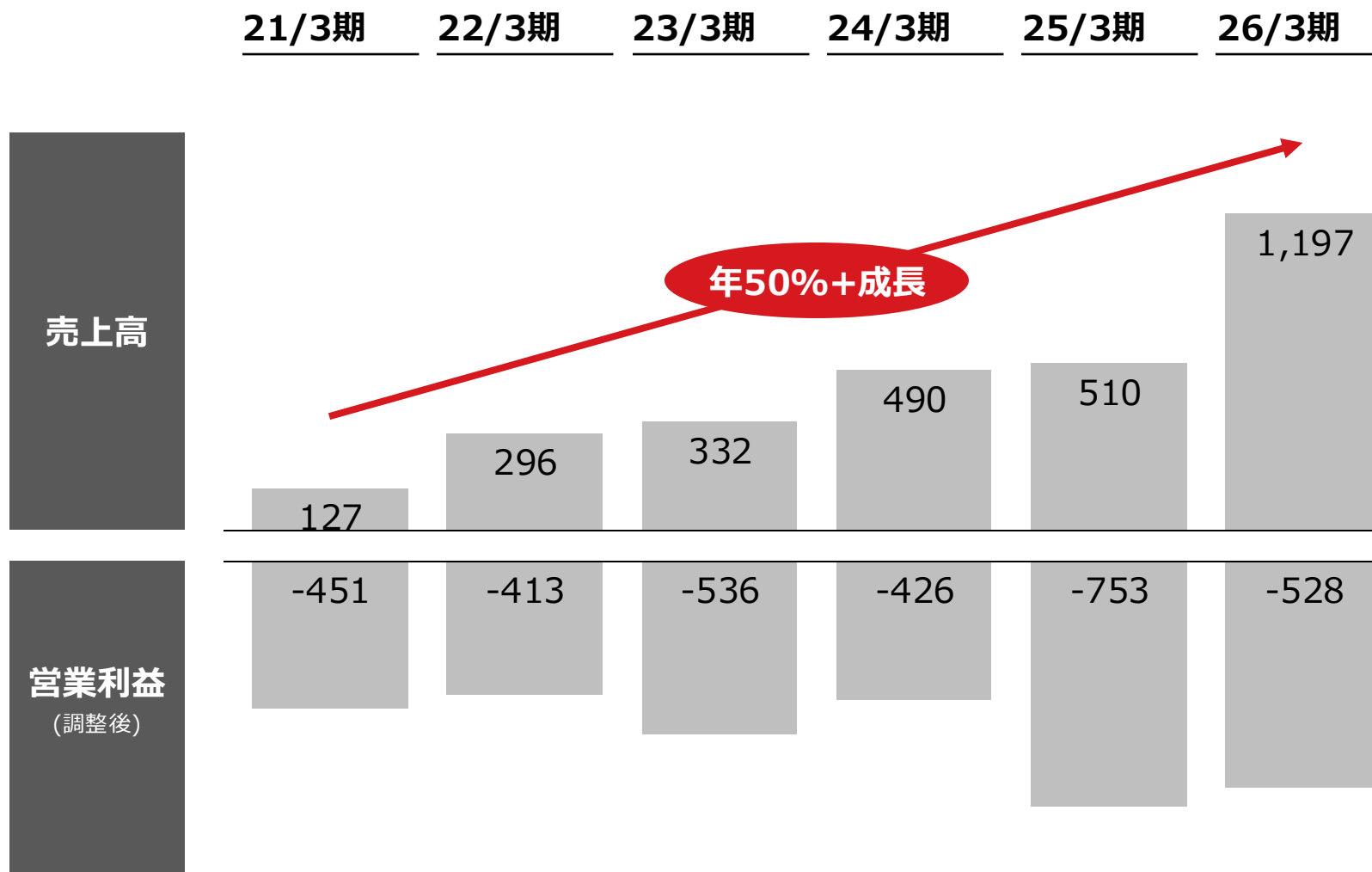


## ビッグテックと何が違うのか？

- 「**言語中心のAIモデル**」に取り組むのがOpenAIなど
- 「**計算・シミュレーション**」に取り組むのがNvidiaなど
- 「**空間適応・身体適応・産業適応**」に取り組むのがKudan

# 実績と事業計画

---



## 前期 (26/3期) の振り返り

### ■ 通期業績は売上・利益ともに業績予想<sup>1</sup>を上回り着地

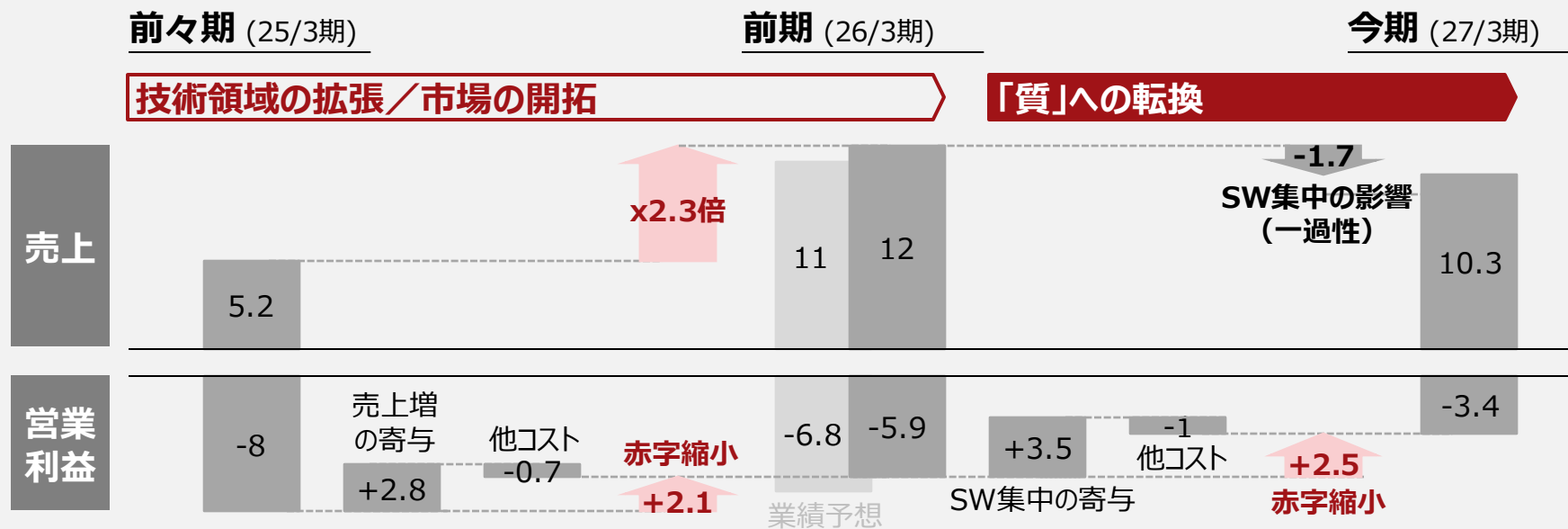
- 売上は12億円となり、前年から2.3倍に拡大
- 営業利益は△5.9億円となり、前年から2.1億円縮小（売上増は2.8億円縮小に寄与）

## 今期 (27/3期) の見通し

### ■ 高粗利SW（ソフトウェア）への事業集中により、売上は小幅減となるが、営業利益は改善が加速

- 営業利益は前年の縮小幅を上回る2.5億円縮小（SW転換は3.5億円縮小に寄与）
- 売上減は転換点での一過性の変動であり、来期以降に収益性を高めた売上成長・黒字化を見込む

## 業績の推移 [億円]



# 業績概要

- 技術・事業領域の拡大と、フィジカルAI市場の本格化を背景に、**通期で売上伸長・赤字縮小が進捗**
- 高粗利SW（ソフトウェア）への事業集中によるHW（ハードウェア）売上の前倒し計上も影響し<sup>1</sup>、**上方修正<sup>2</sup>以降もさらに業績が伸長**（売上は予想比で+9%成長／赤字は予想比14%圧縮）

[百万円]	前々期 (25/3期)	前期 (26/3期)		実績	予想 (修正後) との主な差分	前々期との主な差分
		予想 (期首時点)	予想 (修正後)			
売上高	517	700	1,100	<b>1,197</b>	・SW集中の影響によるHW売上の前倒し計上	・デジタルツイン向けSW・HW ・政府案件などの大型案件
営業利益	△800	△780	△680	<b>△586</b>	・売上による利益増 (+40) ・固定費 <sup>4</sup> 減 (+20)	・売上による利益増 (+280) ・固定費 <sup>4</sup> 増 (-50)
経常利益	△743			<b>△174</b>		・為替差益の影響 (+330)
純利益	△801			<b>△188</b>		
調整後営業利益 <sup>3</sup>	△753	△720	△620	<b>△528</b>		・欧州R&D補助金増 (+10)

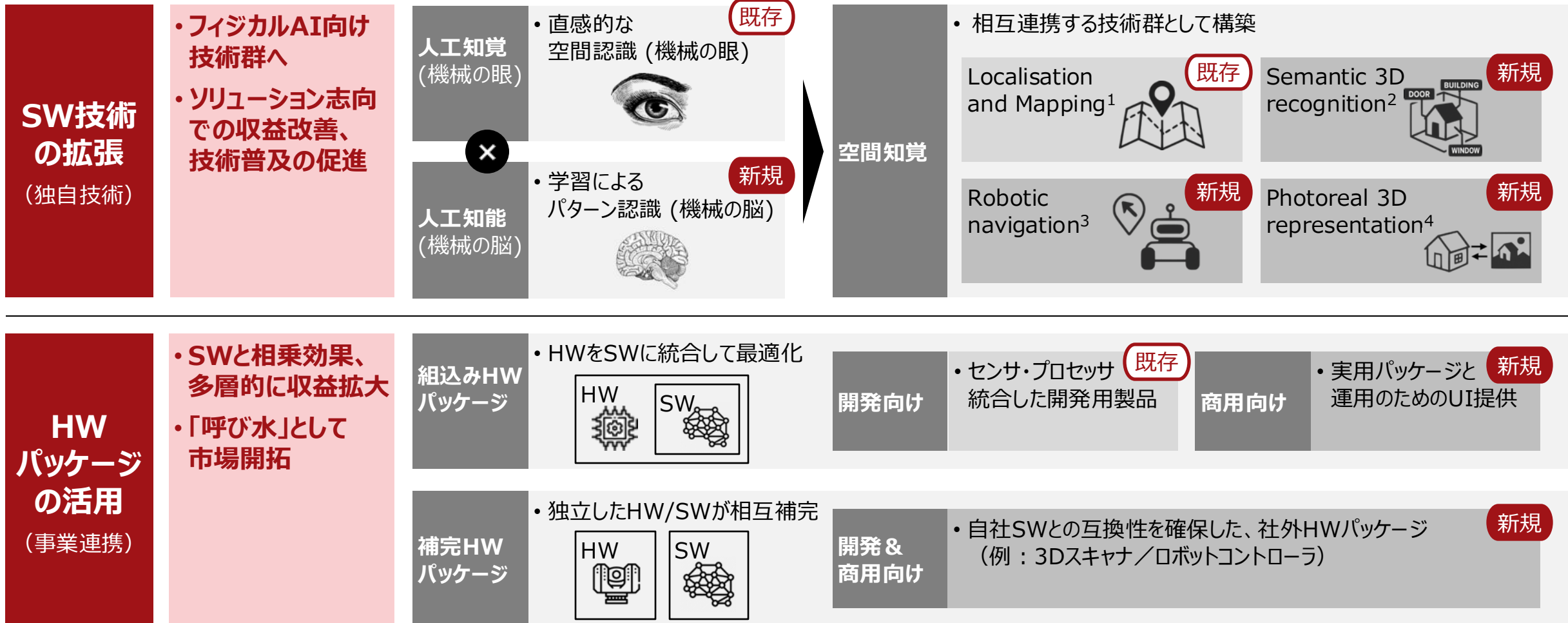
1. SW集中の新方針にともなう関連案件の契約見直しを実施し、前期と今期の販売計画を最適化3. 営業利益（損失）に每期経常的に発生する政府からの研究開発補助金収入を加えた、事業収益性の指標となる利益数値  
2. 過去資料 2026年3月期 通期業績予想の修正 を参照  
4. 販管費のうち一時的な費用を除いたもの。開発費を含む。

# 業績伸長の背景（1/2）

- 収益強化と技術普及のためSW（ソフトウェア）とHW（ハードウェア）双方で補完技術を強化し、**空間知覚プラットフォームに技術・事業領域を大幅に拡大**

狙い

「要素技術」から「空間知覚プラットフォーム」への拡大



1. SLAMなどに関連した自己位置推定と環境地図生成  
 2. 3Dデータ・地図の物体認識・セグメンテーション・意味合い抽出

3. ルート計画・障害物回避などの自律移動ナビゲーション  
 4. Novel View Synthesisなどによる3Dデータ・地図の写実的表示

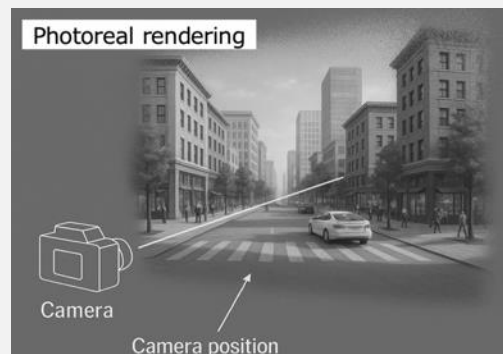
# 業績伸長の背景（2/2）

## ■ 技術需要の次世代シフトが加速、**当社方針が市場需要拡大を捕捉**

既存技術が一段落し、市場は革新期に突入...

### 技術革新

#### デジタルツイン



- ・フォトリアル技術とそのAI活用が革新的な潮流となり、実用化が進行

### 関連する追い風

- ・センサ・スキャナ機器の低価格化も、ソリューション実用化を後押し

当社の強みが需要を獲得しやすい環境へ

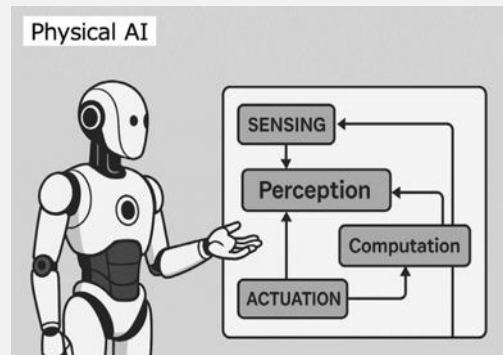
### 先進性

- ・先進的な技術応用で当社は先行（フォトリアル技術・AI活用）

### 希少性

- ・SW/HW/ソリューションを一貫提供する希少性にも需要が高まり

#### 移動ロボット



- ・AIがロボットを通して現実世界で行動する「フィジカルAI」が急速に発展

- ・脚型・人型ロボット等ロボット機体の進化も、先進SW需要を後押し

- ・複雑環境対応や高度ロボティクス等、先進的アルゴリズムの必要性が増大

- ・デジタルツイン・ロボットでの一貫した技術連携を提供できる希少性が独自優位性<sup>1</sup>として発揮

**「空間を理解し、デジタル化し、ロボットを動かす」の一連を統合的に捉える先進技術としての強み**

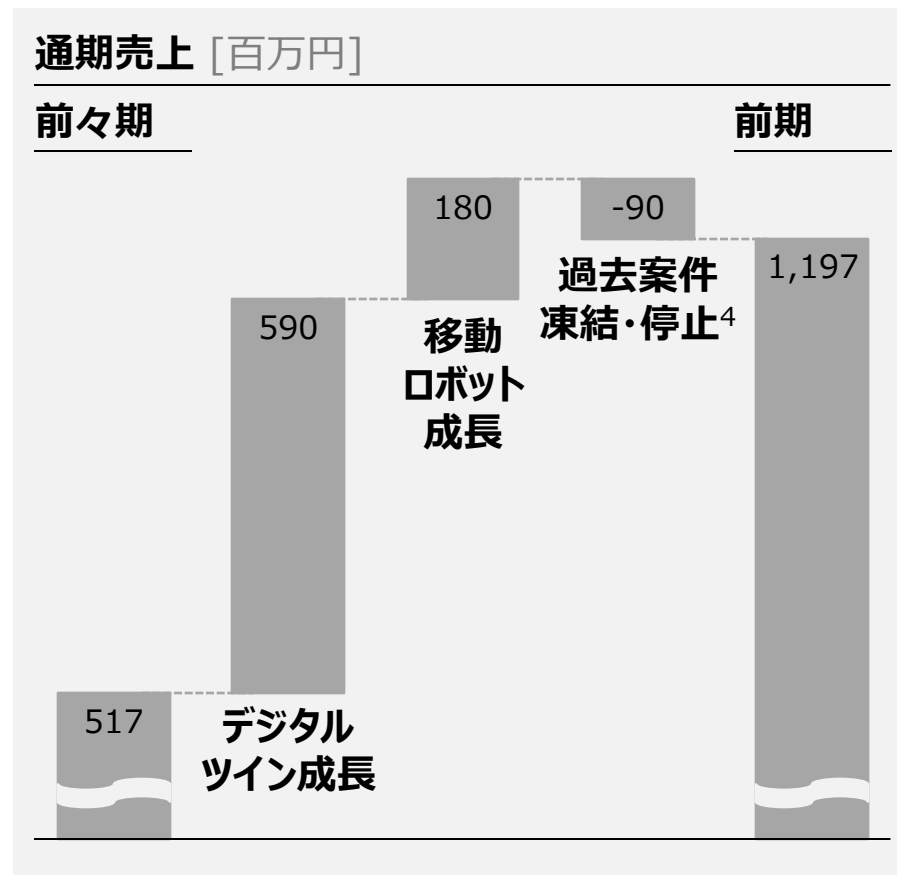
1. Novel View Synthesisなどによる3Dデータ・地図の写実的表示

# 業績伸長の詳細

- デジタルツイン・ロボット双方で**多角的に売上が伸長**
- デジタルツインでは**短期収益と技術シナジーの確保**、ロボットでは**中長期競争力と開発体制の強化<sup>1</sup>**に寄与

成長戦略に合致して売上が伸長し...

売上が前年比2.3倍に拡大



1. 研究開発費用に対応した売上が充当され、開発に係る実質的なコスト負担を効率化することで体制を維持・強化  
 2. 過去資料 2025年3月期 通期決算説明資料のP12~15を参照

3. 過去資料 2026年3月期 1Q決算説明資料のP7~10を参照  
 4. 非コア技術・事業としてリソース配分を見直した案件

# コスト構造の改善

- 前々期の開発増強を経て、**前期はコスト最適化の計画<sup>1</sup>を通期で達成**
- 戦略的な構造変化を過渡期として終え、**今後は持続可能な開発体制の維持・強化の方針**

## 固定コスト<sup>2</sup>の推移（年間換算<sup>3</sup>） [百万円]

前々期（25/3期）

前期（26/3期）

今期（27/3期）

期首時点の実績

期首時点の実績

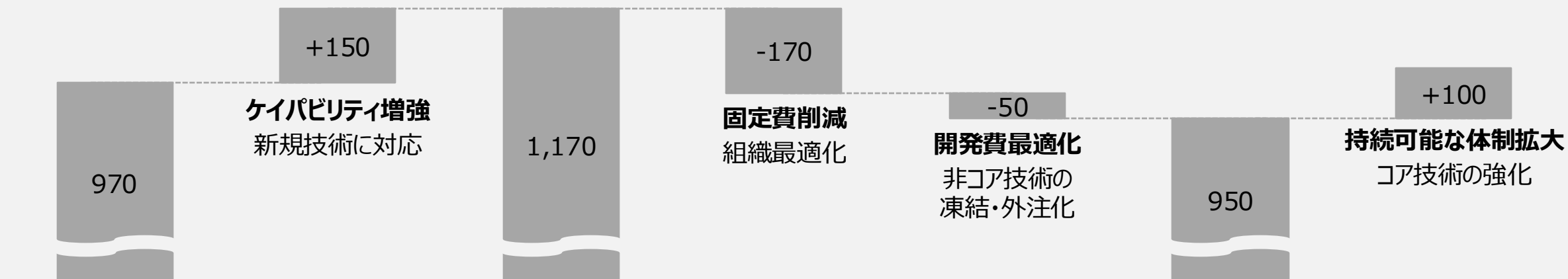
期首時点の実績

戦略実行にともなう構造変革（過渡期）

持続的な事業投資

新技術領域への拡張<sup>1</sup>

定常コストの最適化



1. 過去資料 2025年3月期 通期決算説明資料 のP16を参照  
 2. 販管費のうち一時的な費用を除いたもの。開発費を含む。  
 3. 各時点での費用実績及び見込を12か月換算したもの

# 業績予想詳細

- 低粗利HWから**高粗利SWへの転換が進む見込み**
- 売上減少と研究開発投資拡大を織り込みながらも、**大幅な収益性向上により赤字縮小はむしろ加速、来期以降での収益性の高い売上成長と黒字化を見込む**

[百万円]	前々期 (25/3期)	前期 (26/3期)	今期 (27/3期) 予想	前期との主な差分
売上高	517	1,197	<b>1,030</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>• SW売上増 (+360)</li> <li>• HW売上減 (-530)</li> </ul>
営業利益	△800	△586	<b>△340</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>• SW集中による利益増 (+350)</li> <li>• 研究開発等による固定費<sup>2</sup>増 (-80)</li> </ul>
経常利益	△743	△174		
純利益	△801	△188		
調整後 営業利益 <sup>1</sup>	△753	△528		

1. 営業利益（損失）に毎期経常的に発生する政府からの研究開発補助金収入を加えた、事業収益性の指標となる利益数値。ただし、今期については、現時点で不確定要素が多く、適正かつ合理的な予想の策定が困難であるため非開示とし、今後予想可能性が高まり次第、開示を予定。
2. 販管費のうち一時的な費用を除いたもの。開発費を含む。

# 中長期の成長イメージ

- 技術・事業領域の拡大戦略のもと、**短期的には多角的な売上拡大・収益性最適化を行いながら**、中長期的にはフィジカルAI市場の加速に合わせ、**商用技術の普及と高粗利SW販売拡大で飛躍的な成長を目指す**

実績							成長イメージ		
21/3期	22/3期	23/3期	24/3期	25/3期	26/3期	27/3期	中期（2年）	長期（～10年）	

## コア技術提供（SWアルゴリズム）

顧客製品化の達成と  
市場での技術実績の積み上げ

開発案件を中心とした売上

## 事業拡大（SWソリューション・HWパッケージ）

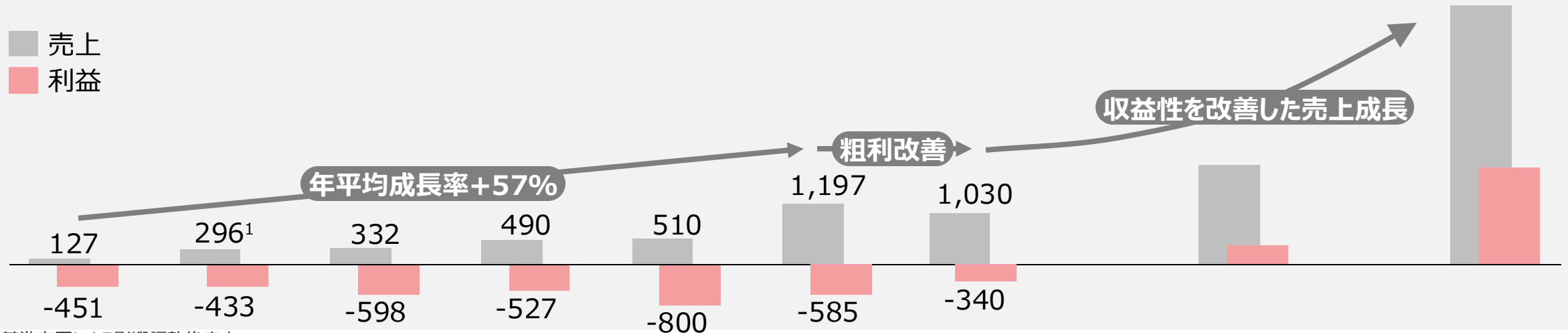
デジタルツインが先行して拡大、  
ロボットは開発支援の大型化で成長

多角的な売上拡大・収益性最適化  
(HWを活用したSW普及)

フィジカルAIの本格的発展にともなう  
市場拡大と商用技術の販売拡大

SW販売拡大を中心とした高収益な成長  
(ロボット・デジタルツイン・データ横断)

■ 売上  
■ 利益



1. 会計基準変更による影響調整後売上  
2. 事業フェーズの進展に伴い、製品化件数のみでは成長戦略の進捗を適切に示すことが難しくなったため、当期より主要KPIとしての開示を取りやめています。現在は、売上高、営業利益、収益構成等を複合的に用いて、成長戦略の進捗を評価しています。



# 成長戦略

---

## ■ 前期方針から継続・発展し、新たに「高粗利SWへの集中」「フィジカルAI向けデータ技術の提供」に着手

### 前期の方針<sup>1</sup>

### 今期の方針

HWパッケージ  
の活用

A: 更新

高粗利SW  
への集中

- これまでのHW販売を「呼び水」<sup>1</sup>としたSW販売への注力拡大と粗利最大化

SW技術・  
ソリューション拡大

B: 継続

SW技術・  
ソリューション拡大

- ロボット・デジタルツイン両領域で、継続した技術・事業拡大を推進

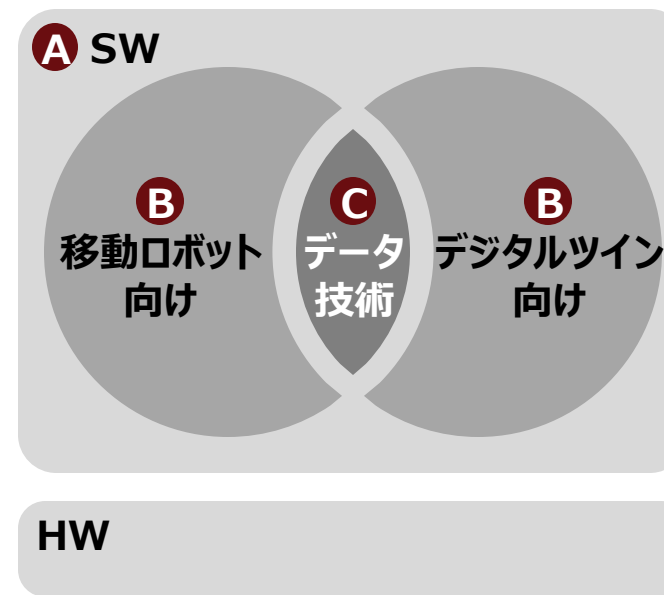
C: 新規

フィジカルAI向け  
データ技術の提供

- データ構築のためのフィジカルAI基盤技術
- ロボット・デジタルツインの交差領域として、更なるシナジーと独自優位性を確立

コスト最適化

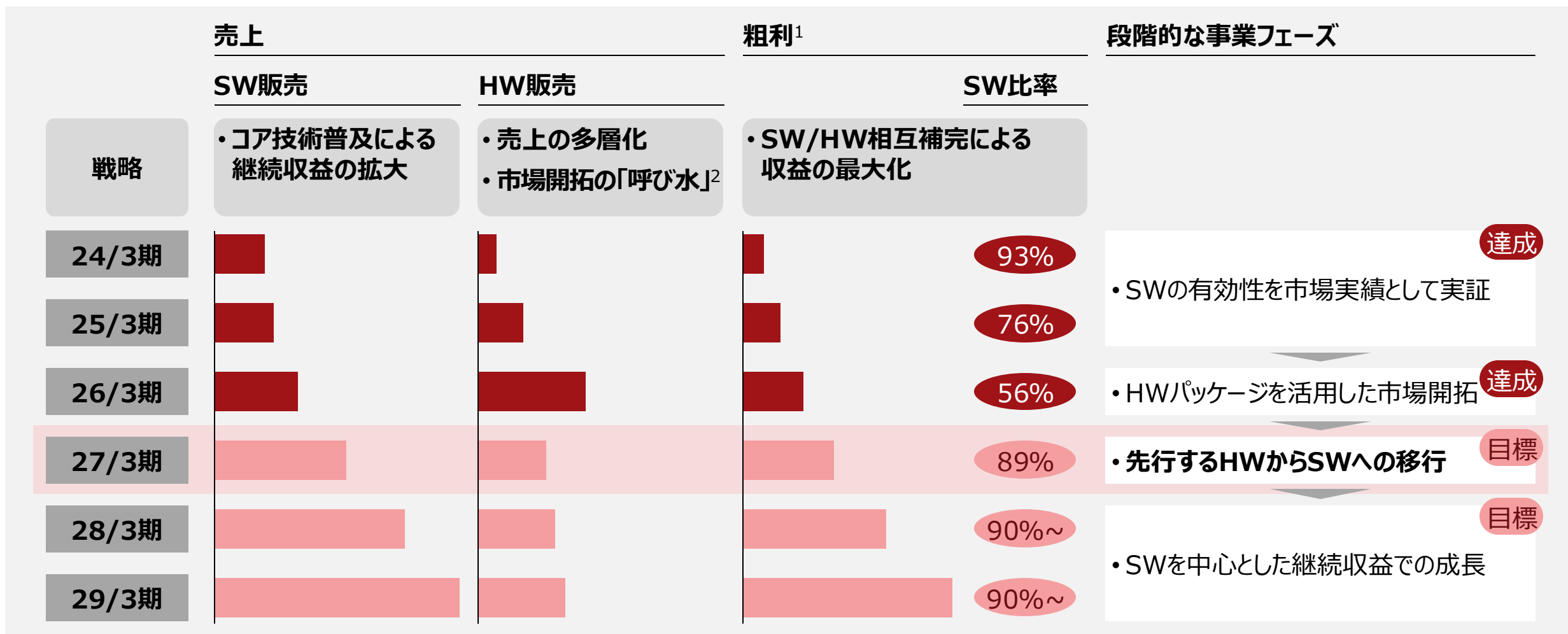
(目的の達成により完了)



1. HW統合パッケージは顧客が技術検証・設定などの初期導入コストが低く採用できることにより、その後の発展的な案件継続に寄与する

# A 高粗利SWへの集中

- HWで効果的に補完しながら、**中長期でのコアSW技術の普及を前提とした収益最大化を目指す**
- 先行する低粗利HWから高粗利SWへの集中により、**今期は粗利<sup>1</sup>におけるSW比率を大きく改善**



1. 連結損益計算書の売上原価のうち、研究開発費に相当する額を控除し算定した粗利（政府案件の費用は研究開発的な性質を一部有するものの、案件の特殊性により当該費用が売上原価として会計処理されることを考慮）  
 2. HW統合パッケージは顧客が技術検証・設定などの初期導入コストが低く採用できることにより、その後の発展的な案件継続に寄与する

# A 高粗利SWへの集中

- SW集中の実行にともない<sup>1</sup>、今期に想定していた**HWパッケージの一部売上が前期に前倒しで計上**
- 一過性の売上減であり、**来期以降に収益性を高めた売上成長・黒字化を見込む**

業績予想時点（26年3月）から、  
SW/HWの戦略的な成長を計画しており...

前期実績としては、  
SW集中の実行に際してHW販売の前倒し計上が発生

25/3期      26/3期      27/3期      28/3期

25/3期      26/3期      27/3期      28/3期

方針

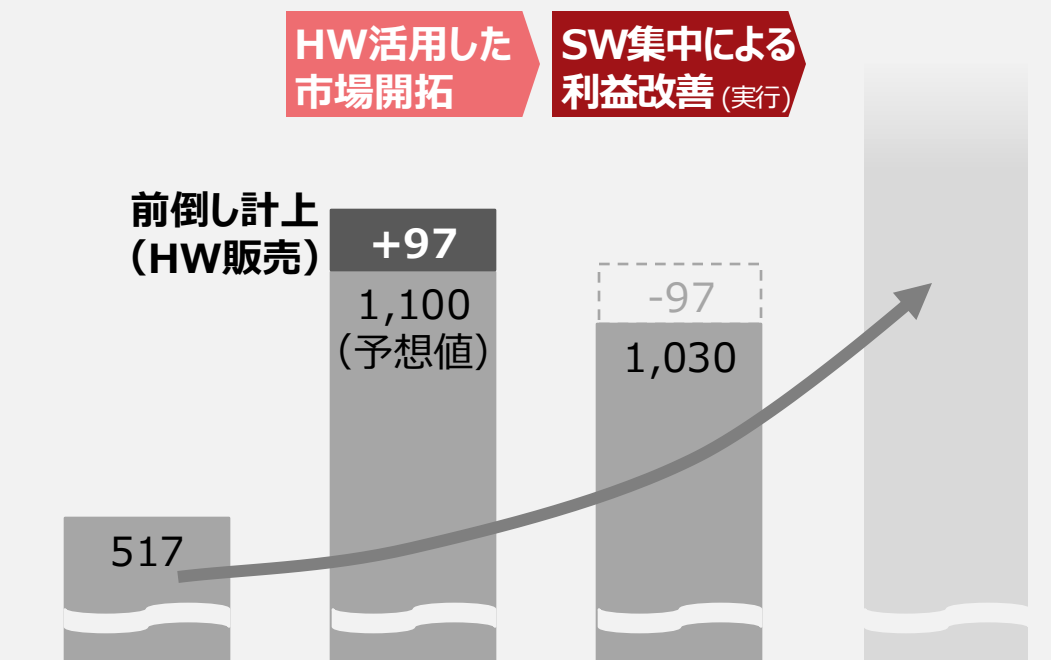
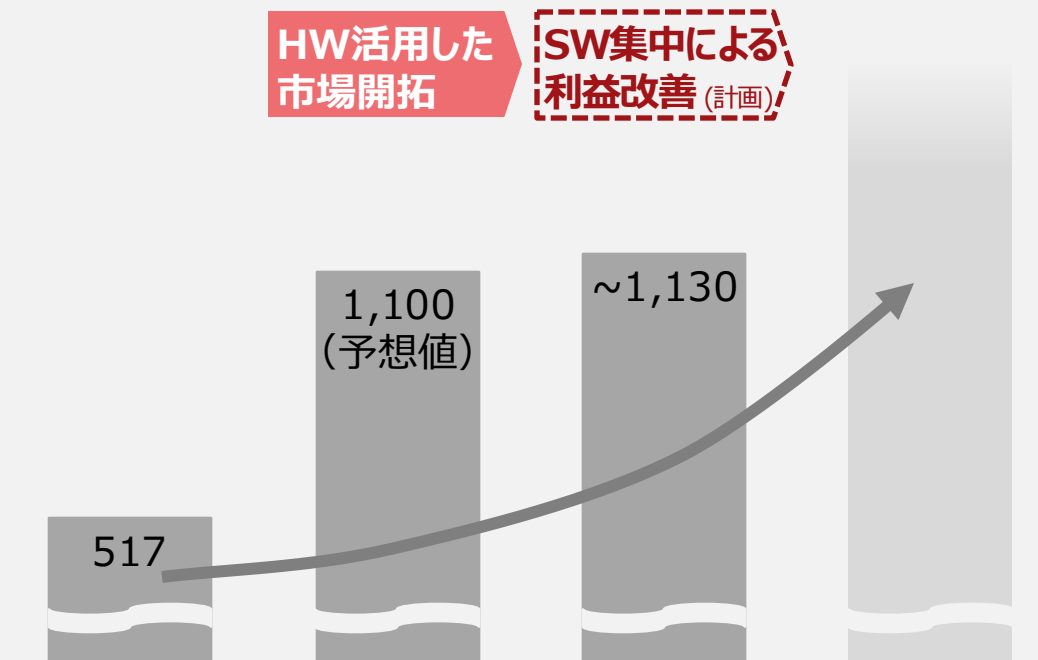
HW活用した  
市場開拓

SW集中による  
利益改善 (計画)

HW活用した  
市場開拓

SW集中による  
利益改善 (実行)

通期売上  
[百万円]



1. 新方針にともなう関連案件の契約見直しを実施し、前期と今期の販売計画を最適化

# B SW技術・ソリューションの拡大 — デジタルツイン

- ソリューション（Kudan PRISM）を中心に**継続的な顧客基盤と収益の拡大を進展**
- フィジカルAI向けとして、**データ技術提供と連携した独自優位性も強化**

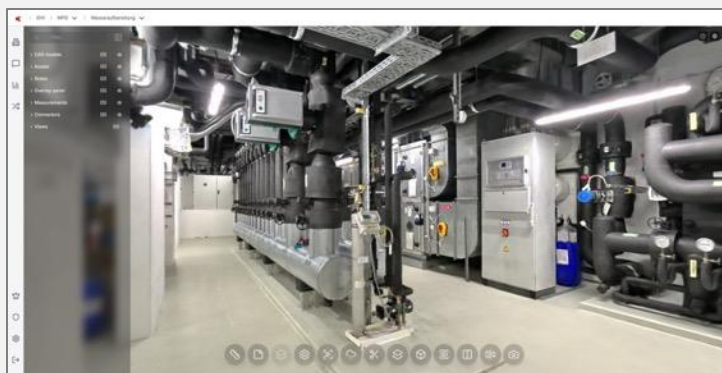
## デジタルツインソリューション（PRISM）

**概要**

- ・設備管理の生産性向上
- ・データ精度・有効性の従来課題を解決する高い実用性

**先進機能**

- ・「人間の知覚と同等」の空間キャプチャで現実を丸ごと3D化
- ・人間の代わりに3D空間内で多様な知能タスクを遂行



## 前期（26/3期）の成果

**顧客基盤の拡大**

- ・顧客数: **+200%増**
- ・展開国数: **3カ国**
- ・主要業界: **製造・物流・建設・インフラ・エネルギー・設備管理**

**顧客案件フェーズ進展**

- ・効果検証を経て、**実運用へ進展**
- ・SW基盤での**継続収益モデルの確立**
- ・27/3期への**継続率100%**

**競争優位性の強化**

- ・市場最新で**先進機能を実装**
- ・SW/HW/ソリューションでの**包括的技術提供の確立**  
(独自手法として75%の案件で実施)

## 今期（27/3期）の計画

- ・顧客数: **+150%増**
- ・展開国数: **10カ国に拡大**
- ・業界拡大: 新たに**不動産・通信・公共**

- ・**実運用による継続収益の達成**

- ・**フィジカルAI向けデータ技術と連携しロボット向けへの展開拡大**  
(フィジカルAI向け優位性の拡大)

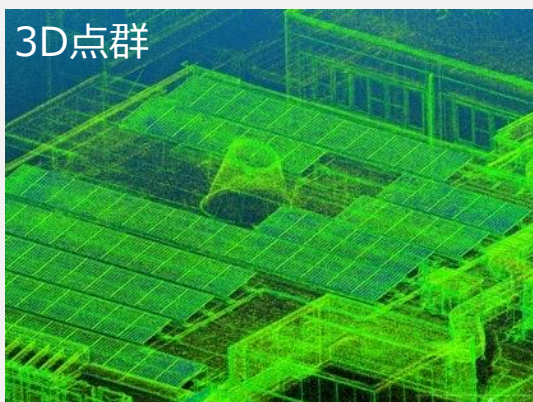
**フィジカルAI向けデータ技術の提供と連動** C

# B SW技術・ソリューションの拡大 — デジタルツイン（PRISM詳細）

- 社会需要が非常に高いものの、従来手法では実用化に制約があった分野に対し、Kudan PRISMは革新的な技術手法を導入し、ソリューションの実用化と普及を目指す

## PRISMによる先進技術のソリューション化

従来手法



3D点群

- 3D点群中心のデータ
- 実用化が限定的  
(AI精度不足、データ容量・取扱い困難、システム連携困難)

Kudan  
PRISM  
による  
革新手法



PRISM

- 「人間の知覚と同等」なフィジカル空間知覚（フォトリアル表示など）
- 現実理解AIエンジン（セマンティック3D認識など）で、AI有効性が飛躍的に拡大
- データ利用・連携が効率化

## 幅広い産業DXに活用（一部事例を抜粋）

施設・  
設備管理



- 従来困難だった領域でのDX促進により、業務自動化・効率化・作業遠隔化を実現

インフラ  
点検保守



- 先進国共通の現場労働力不足、老朽インフラ維持に向けて需要が拡大

スマート  
シティ・  
災害対応



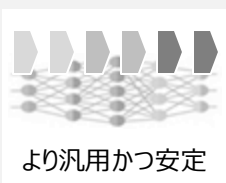
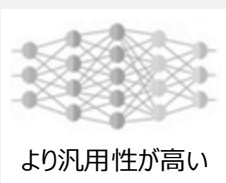
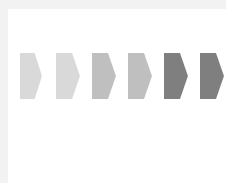
- 需要が高まる災害シミュレーション・防災設計高度化に対応、人命保護・災害復興に貢献

# B SW技術・ソリューションの拡大 — 移動ロボット

- 前期から推進するロボット向け自律移動の基盤技術にて**継続的に売上・案件規模を大型化**
- 市場での先行ポジションを強化する**フィジカルAIモデル導入、データ技術提供との連携にも注力**

## ロボット自律移動基盤の進化

**数理的的手法中心** (既存)   **フィジカルAIモデル** (最新)   **ハイブリッドモデル** (今後)



より汎用性が高い

より汎用かつ安定

- 移動ロボットへのフィジカルAIモデル実装は先進性が高く<sup>1</sup>、市場での先行ポジションを強化
- 将来的なハイブリッド化に向けても先行



## 前期 (26/3期) の成果

## 今期 (27/3期) の計画

### 技術先進性

- コアSWから技術群へ拡張し、**ロボット向け自律移動の基盤技術 (数理的的手法)** を提供開始

- **知覚データ主導の基盤技術 (フィジカルAIモデル)** を提供開始 (移動ロボットでは世界最新)

### 顧客案件フェーズ進展

- **政府案件として自律移動のSW基盤開発を主導**
- 移動ロボット実用化を目指す **事業連携を建設業界横断で進捗**

- 売上規模の拡大: **+100%増**
- **大規模案件の継続・拡大を見込む** (政府案件・他)

### 競争優位性の強化

- 高精度・高速・安定な**独自アルゴリズム (SLAM等)** および補完技術との**最適な統合**

- **フィジカルAI向けデータ技術と連携し、デジタルツインの活用を拡大** (フィジカルAI向け優位性の拡大)

**フィジカルAI向けデータ技術の提供 と連動** C

1. フィジカルAIモデルの実装は一般的に、アーム型ロボットの操作 (=ロボットの腕) が先行しており、ロボット自律移動 (=ロボットの足) はデータ取得が難しく非常に限定的となっている市場状況

# B SW技術・ソリューションの拡大 — 移動ロボット（市場背景）

- 移動ロボットの市場は巨大であり、**実用化に向けた技術課題解決への需要は高い**



従来技術で実用可能なのは3~5%程度

2次元認識



インフラ活用



GPS測位



2040年には300兆円<sup>1</sup>に成長する移動ロボット市場の大半は次世代技術が必要な複雑環境

頻繁な環境変化



大量の移動物・人



屋内外混合



特徴が少ない環境



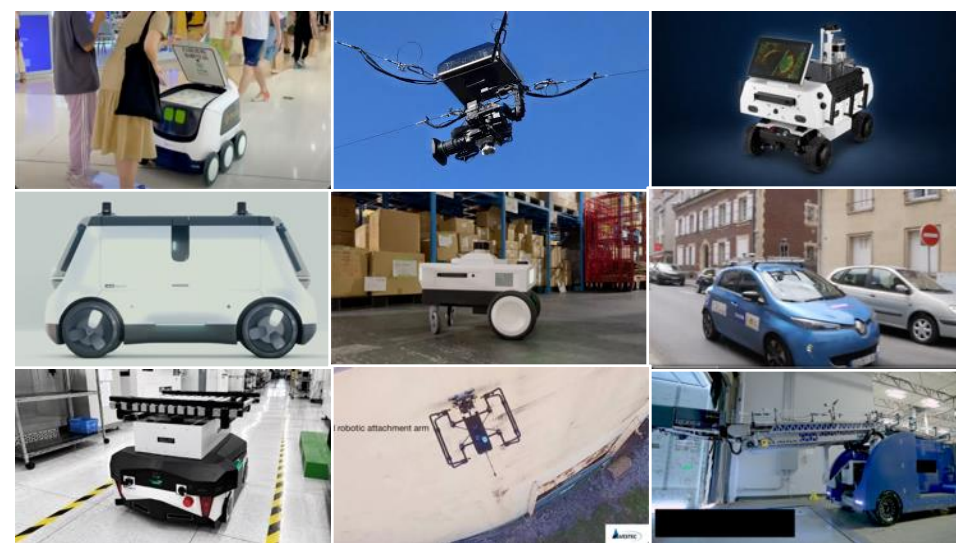
複雑な立体構造



屋内オープンスペース



Kudanはグローバルでの実績・商用化



1. BCC ResearchやMarket Research Future等の調査より、複数の高成長セグメント（CAGR 12~16%以上）を背景に、2040年には市場全体が300兆円（約2兆ドル）規模に達する可能性

## ■ 経産省・建設業界大手が推進するSW開発事業で開発リーダー<sup>1</sup>として推進、日本におけるコア技術の牽引を担う

### 日本の国策

- 深刻な労働力不足の解消のため、**政府と産業界はフィジカルAI・ロボット施策を強化**
- ロボット自律移動は**難易度が高い現場向けに技術革新が必須**

経済産業省資料抜粋

**AIロボットによる社会課題への対応**

- 日本における構造的・慢性的な**人手不足**は、地域の生活必需サービス等で顕著に。深刻な供給制約社会の到来が見込まれることから、**ロボット導入が不可避**。
- サービス分野等のロボット導入が困難だった市場（**少量多品種市場**）においては、  
①**多様な動作の実現**、②**人と接する複雑な環境への対応**が不可欠。
- そのためには、ロボットの**開発の柔軟性**と**判断・動作の自律性**を革新させる取組が必要。

現状課題	開発制約	技術制約
ロボットのハード・ソフトが一体化しており、開発の柔軟性が低い	ロボットのハード・ソフトの切り分け・分割化による汎用性・拡張性の革新	周囲の環境等に合わせた自律的に判断・動作を行うことが困難
克服方法	高度なAIの融合による自律性・拡張性・操作性の革新	
必要な取組	ロボットのオープンな開発環境の構築及び生成AIの基盤モデルの開発	

### 案件概要

- 建設現場向けを導入として、**建設RXコンソ<sup>2</sup>**（建設大手各社加盟）と**業界横断で推進**
- 汎用的なロボット自律移動の技術を確立し、将来的にはより幅広い産業<sup>3</sup>へ展開

### 当社の役割と今後への期待

- 実績を評価され、**中核的リーダー<sup>1</sup>として推進**
- 当社技術の**社会実装・普及も加速**
- フィジカルAI・ロボット施策を強化する**政府と継続して緊密に連携**

建設向け自律走行ロボットのイメージ



- **産業横断基盤の開発プラットフォーム・マーケットプレイスへ提供**
- **高市新政権の成長投資の戦略分野<sup>5</sup>の筆頭となるAI・半導体と連携強化**

### 公募元

NEDO（国立研究開発法人新エネルギー・産業技術総合研究機構）

### 事業名

ポスト5G情報通信システム基盤強化研究開発事業／ロボティクス分野におけるソフトウェア開発基盤構築

### 採択テーマ

建設市場のロボティクス分野におけるソフトウェア開発基盤の研究開発

### 実施期間

2025年度～2027年度予定

### 全体予算

103億円（3年間合計）

1. ロボット自律走行を実現するためのソフトウェアモジュールの開発を主導（計画策定・進行、中核技術の設計と開発、参画企業らの開発成果の統合）  
 2. 建設業界が抱える就労人口の減少、生産性・安全性の向上などの諸課題の解決に向け、施工ロボットやIoTアプリ等の開発と利用に係るロボティクストランスフォーメーション（ロボット変革）を推進すべく設立した民間団体  
 3. 物流・製造・インフラ管理・農業など幅広い産業への波及的な展開にも期待

- Kudanの空間知覚は、**フィジカルAIの根幹となるデータ構築のための中核技術として、競争優位性と収益に寄与**

## 身体性のないAI

デジタル空間で  
「考える知能」



## 身体性のあるフィジカルAI

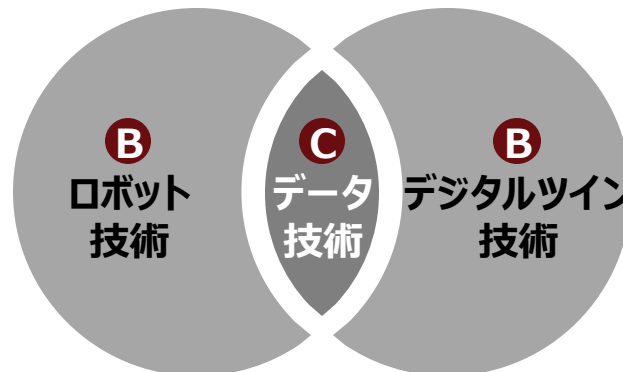
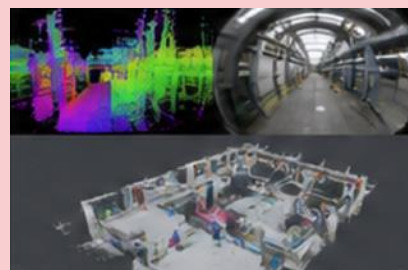
現実空間で  
「行動する知能」



## 膨大な空間行動データの整備はフィジカルAIの発展の鍵

データ技術	概要
データ取得の効率化	・ ロボット自律移動によるデータ取得の自動化
データ品質の確保	・ シミュレーション環境（デジタルツイン）と検証モデル（ロボット）を融合した品質検証
データ拡張の実現	・ デジタルツイン活用により、有限の実空間データを大規模化し、データ有効性を強化

行動から取得する  
空間知覚関連データ等



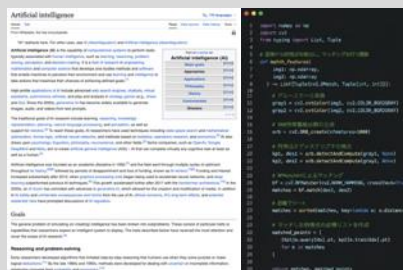
- ・ ロボット・デジタルツインの交差領域にて高いシナジー
- ・ 一貫した技術提供は有効性・独自性が高く、フィジカルAIでの競争力・長期収益の強化に貢献

~2035年で20兆円市場<sup>1</sup>

知能の種類

必要なデータ

デジタルで扱う  
文章・画像・コード



	顧客	概要	進捗
デジタルツイン	 総合インフラ大手	・ ライフライン施設管理の自動化・省人化向けDX	・ トライアル導入を開始
	 インフラ管理大手	・ 上下水道の設備管理向けDX	・ 業務適応に向けた個別開発を実施
	 道路インフラ大手	・ 高速道路点検管理向けDX	・ 基幹システムとの連携に向けた開発を実施
	 自治体	・ 道路等のインフラ維持管理	・ シティスケールのデジタルツインを生成
	 建設ソリューション	・ 施工進捗管理を目的とした建設現場向けDX	・ 商用サービス開始に向けた開発を実施
	 不動産設備管理大手	・ 施設管理業務の自動化・省人化向けDX	・ 戦略的業務提携に基づき、導入準備を継続中
	 点検ソリューション	・ 施設定例点検業務の自動化・省人化向けDX	・ トライアル導入を継続中
	 プラント施工大手	・ 危険区域でのデジタルツイン施工シミュレーション	・ トライアル導入を開始
	 大手自動車	・ 自動運転マップ生成向けフォトリアル技術	・ 個別開発支援を実施
ロボット	 Vecow（産業用コンピュータ）	・ AIロボット開発キット向け自律走行技術	・ 製品化を達成（正式ローンチ済）
	 点検ロボット	・ 点検用の四足歩行ロボット向け位置推定	・ 顧客開発を支援中
	 デジタルツインソリューション	・ 施設管理の自動化・省人化向けDX	・ トライアル導入を開始
	 ドローンソリューション	・ 物流施設用ドローン向け位置推定	・ ソリューション開発に技術提供開始
	 プラント施工大手	・ 危険区域での重機遠隔操縦向け位置推定	・ 技術提供開始、検証を継続中
	 FOX Sports（大手放映）	・ XR放送用ロボットカメラ向け位置推定	・ NFLフルシーズンでの商用運用を達成
	 製造大手	・ リアルタイム車両管理向け位置推定	・ 製品化に向けた技術提供
	 産業車両大手	・ 産業車両の自律走行向け位置推定	・ 製品化に向けた技術提供

# リスク情報

---

# 主要なリスクおよび対応策

- 下記の通りに成長戦略へ重要な影響を与える可能性のあるリスク及び対応策を認識
- 詳細は26年3月期有価証券報告書の「事業等のリスク」をご参照

#	主要リスク	概要	対応策
1	市場動向	空間知覚市場の成長が想定より遅れる可能性。	産業・地域・顧客層を広げ、事業機会を分散。
2	技術革新・競争	代替技術や競合の出現により技術優位性が低下する可能性。	R&D継続、技術動向の監視、M&A・提携・出資を活用。
3	知的財産	第三者の知財を侵害する可能性。	法務・監査体制と連携し、知財リスクを管理。
4	組織体制	小規模組織のため、管理・執行体制が追いつかない可能性。	人員増強と内部管理体制の強化。
5	人材	優秀な人材の採用・育成・定着が進まない可能性。	グローバル採用、育成、柔軟な働き方を推進。
6	収益化	顧客の製品化・導入が遅れ、継続収益化が進まない可能性。	デジタルツイン・ロボティクス双方で社会実装を推進。
7	収益変動	案件進捗の遅れにより売上計上時期が変動する可能性。	事業開発・技術支援人員を増やし、案件進捗を管理。
8	海外事業	各国の法規制・商習慣・経済環境により損失が生じる可能性。	事前調査、管理人材強化、現地専門家との連携。
9	為替	為替変動が業績に影響する可能性。	為替動向を監視し、必要に応じてヘッジを検討。
10	情報管理	機密情報・個人情報の漏洩リスク。	情報セキュリティ規程を整備・運用。
11	災害・感染症	災害等で事業活動が停止する可能性。	リモートワーク体制により事業継続性を確保。
12	社歴の浅さ	過去実績が少なく、業績判断材料が限定的。	IR・適時開示により情報提供を強化。
13	配当政策	無配が継続する可能性。	成長投資と財務状況を踏まえ、配当を検討。

## 本資料の取り扱いについて

本資料は、当社の事業および業界動向に加えて、当社による現在の予定、推定、見込みまたは予想に基づいた将来の展望についても言及しています。

これらの将来の展望に関する表明は、様々なリスクや不確実性がつきまっています。

すでに知られたもしくは知られていないリスク、不確実性、その他の要因が、将来の展望に対する表明に含まれる事柄と異なる結果を引き起こさないとも限りません。

当社は、将来の展望に対する表明、予想が正しいと約束することはできず、結果は将来の展望と著しく異なることもありえます。

本資料に記載されている当社以外の企業等に関する情報及び第三者の作成に係る情報は、公開情報等から引用したものであり、そのデータ・指標等の正確性・適切性等について、当社は独自の検証は行っておらず、何らその責任を負うことはできません。

本資料における将来の展望に関する表明は、現時点において、利用可能な情報に基づいて、当社によりなされたものであります。

本資料において開示している事業の進捗状況を含む各指標は、今後も継続して決算説明資料等において定期的の開示する予定でございます。

本資料の次回アップデートは、2027年6月に開示を行う予定です。